

試聴会・訪問記掲載

河口無線ハイファイディリティ試聴会報告(2016.3.5)

河口無線で開催された **BIOPHRAGM F-1** の試聴会に行ってきました。

<使用機材>

以下のようなラインアップで計画され、試聴会が進行しました。



スピーカー：バイオフラム **BIOPHRAGM F-1**

プリアンプ：ヴィオラ **CADENZA**

パワーアンプ：ヴィオラ **SYMPHONY**

SACD プレーヤー：アキュフェーズ **DP-720**



当日のセッティング

<試聴の経過>

開発の動機は **JBL4343** などのお大型スピーカーを使っていたが、音がぼらぼらぼらに出てくるマルチユニットの問題を解決するためにフルレンジにチャレンジするこ

とにしたとのことでした。ブランドの由来は生体の振動板という意味で、振動板を鼓膜に近づけることを目標とし、軽量で強度のある炭素繊維を使用し、鼓膜の構造を意識した軽さと炭素繊維の方向性を持たせ、コーンとボイスコイルボビンの一体化やセンターキャップも炭素繊維の軽いものとするなどの方針で開発を行ったとのことでした。また、キャビネットはレッドオークの集成ムク材を使用し、高級車の内装に使われるというクラロ・ウオルナットの突き板を使用しているとのことでした。ユニットのフレームも音量を上げたときにも耐えられるようアルミの削り出しの強度のあるものとしています。

できるだけ、多くのソースを聴いてもらいたいということで、まずは低音のクオリティの確認という意味からコントラバスの曲が2曲、ベースのソロの入ったジャズコンボ、チェロなどがかけられました。スピーカーの大きさからすると、低音の量感と弾み具合は大型スピーカーに負けないくらいのものでした。次に女性ボーカル、ムターのヴァイオリンとウイーンフィルの共演、コリオラン序曲、木管と古楽アンサンブルなどがかけられましたが、女性ボーカルでは中域のしっかりした音像が聴けたものの、クラシックの弦の倍音の伸びや大編成オーケストラの分離は少し課題が残っている印象でした。

さらに、トランペット、テノールのオペラアリア、ピアノ、パーカーションと続きましたが、もっともよかったのはテノールのアリアで、先の女性ボーカル同様、ボーカルものはフルレンジの欠点が出ず、メリットの方が大きくでてくる印象でした。

<まとめ>

スピーカーの大きさを感じさせない迫力もあり、非常に意欲的な製品でしたが、倍音の伸びや大編成ものの音の分離など、フルレンジの限界もあり、良質のスーパーツイーターと組み合わせてみるのも面白いと感じました。

以上